

患者／医療者／研究者の境界を外し 病いと生きることを問い合わせ直す 現代の病い経験を捉える新たな視点の創造



話題提供者：

A氏：65歳。2型糖尿病当事者。元地方新聞記者。平成元年（1989年）35歳で発症。定年後はチベット旅行に憧れ、高地の山歩きを楽しんでいる。

甲州優氏：看護学校の専任教員を経て訪問看護師となるが、実母が脳出血で倒れた事で在宅看護を約6年半経験する。実母を通して医療の受け手と担い手にある認識のズレを感じ「メッセンジャーナース認定協会」の立ち上げに携わる。

鷹田佳典氏：早稲田大学人間総合研究センター研究員。医療社会学が専門。小児がん患者家族の聞き取り調査をもとに博士論文を執筆。ここ数年は小児科の看護師や医師の聞き取りを行いながら、医療者が患者の死をどう受け止めているかについて研究している。

日時：2018年12月16日（日）9：00～10：20

会場：ひめぎんホール（愛媛県県民文化会館）別館
1階 第13会議室

企画：生き活き研究会（研究代表者：坂井志織）

【プログラム】

1. 開会の挨拶
2. 3名より話題提供
3. アイランドディスカッション
4. 閉会の挨拶



はじめまして

私たち生き活き研は、2018年度からスタートした『慢性の病い経験を捉える新しい概念生成に関する現象学的研究—治癒や管理とは異なる視座の開拓』という研究プロジェクトの活動です。

このプロジェクトでは、従来の医療における治癒や管理に目標をおく見方ではなく、現代の病いを生きる当事者の経験に接近し、生き方そのものから経験を捉える新たな概念を生成することを目的としています。

さらに、研究者だけではなく地域・職域を巻き込み、身近な病いを皆で一緒に考えることを大事にしています。その中で、医療や社会における病いの見方に変革を起こし、多様性を受け入れるインクルーシブな職場や地域社会を創生する価値の提案に繋げていきたいと考えています。

「生き活きカフェ」を中心に、研究会を開催しながら研究成果を出すとともに、社会への還元も同時にしたいと思っています。ご関心のある方、是非カフェや研究会にお越しください！お待ちしております。



生き活き研究会

坂井志織（首都大学東京・看護学）

菊池麻由美（東邦大学・看護学）

細野知子（日本赤十字看護大学・看護学）

小林道太郎（大阪医科大学・哲学）

榎原哲也（東京大学・哲学）

杉林稔（愛仁会総合健康センター・医師）

鷹田佳典（早稲田大学・社会学）

福井里美（首都大学東京・看護学、心理学）

「慢性の病い経験を捉える新しい概念生成に関する現象学的研究—治癒や管理とは異なる視座の開拓」

2017年度トヨタ財団研究助成プログラムD17-R-0563